

新版 高等学校『美術3』教科書のご案内

平成31年度版『美術3』の巻頭には、浅井裕介さんがインドの村の学校で制作した壁画「誕生日の森―父の木、母の山」を掲載しています。村の土を使い、子どもたちと共同で行った壁画制作プロジェクトは、教育に対する関心の低い村の人々が学校に目を向けるきっかけをつくりました。

『美術3』のテーマは、美術で学んだことを他者へ、社会へ、つなげていくこと。社会で生かされている美術の力に生徒が気づけるよう、芸術祭やオリンピックを題材として取り上げています。

また、巻末では6ページにわたって美術で学んだことが生きるさまざまな職業を紹介。メディアアーティストやブックデザイナー、アニメーターなど、その仕事に携わる9人のインタビューを掲載し、社会へ踏み出す生徒たちを応援しています。



アトリエでインタビューに答える浅井裕介さん。
光村図書ウェブサイト「美術のはなし」では、この映像をご覧いただけます。



新版『美術3』(P2-3)
浅井裕介「誕生日の森―父の木、母の山」
ウォールアートフェスティバル2014(インド)での展示。



新版『美術3』
38光村 美術 303

教科書訂正のお知らせ

平成30年度用中学校『美術2・3』教科書では、平成29年度用から下記の箇所を訂正いたします。校内の先生方でご確認のうえ、ご指導の際には、十分ご注意くださいようお願い申し上げます。

ページ	行など	29年度	30年度
51	キャプション 3行目	2006年 きとうこういち 佐藤晃一 [1944～群馬県出身]	2006年 きとうこういち 佐藤晃一 [1944～2016 群馬県出身]
51	キャプション 2行目	2010年 ながともけいすけ 長友啓典 [1939～ 大阪府出身] イラストレーション:黒田征太郎	2010年 ながともけいすけ 長友啓典 [1939～2017 大阪府出身] イラストレーション:黒田征太郎
98	キャプション 3行目	①◎土偶 じょうもん 「縄文の ヴィナス」	①◎土偶 じょうもん 「縄文の ビーナス」

美術準備室 No.13

2018 (平成30)年6月21日

発行人 ■小泉 茂
発行所 ■光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話: 03-3493-2111
www.mitsumura-tosho.co.jp
E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp
デザイン ■Better Days
(大久保裕文+深山貴世)
印刷所 ■株式会社 加藤文明社



2018

美術準備室

つ く る ・ み る ・ 感 じ と る

第 13 号

光村図書

アトリエ訪問
画家

浅井裕介

作家の肖像
日本画家

高山辰雄

放課後ART

●兵庫県南あわじ市立
南淡中学校

●TECHTILE
ワークショップ

この1点

「ブロードウェイ・
ブギウギ」
布施英利

特集

鑑賞から主題を生み出す
北海道教育大学附属釧路中学校

内容解説資料

本誌は、文部科学省による「教科書採択の公正確保について」に基づき、(一社)教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」のによって配布しております。



ア ト リ エ
訪 問

第 13 回

浅井裕介

画家

植物や動物がリズムカルに連なり、
まるで一つの大きな生命体であるかのように躍動する。
浅井裕介の作品には、生命力があふれている。
国内外のさまざまなアートプロジェクトでは、
現地に赴いて作品制作をすることでも知られる
彼のアトリエを訪ねた。

撮影 永野雅子



ダイナミックな絵を生む道具たちは、いつでも手に取れるよう床の上に。



各地で集めた土。赤みがかったものから、モスグリーンに近いものまで、その色彩は豊か。



土や絵の具を使って描いたドローイング。旅先で、その場所の土だけを使って描くことも。

東京都心にほど近い住宅街にある古いビルの一室。扉を開くと、大きな窓から燦々と光が差し込んでくる。この部屋の一角に設けられたスペースが、画家・浅井裕介のアトリエだ。壁画をはじめとした大きな作品の制作で知られる彼は、このアトリエでどのように作品と向き合っているのだろうか。

——窓から見える景色が開けていて、とても気持ちがいいですね。

浅井 空を見るのが好きだから、この眺めのよさは気に入っています。日によっては、富士山も見えるんですよ。

ここは住居も兼ねているので、リビングの一角に自分で板を立てて、アトリエスペースをつくりました。僕はけっこう、大きな絵を描く人だ

と思われているみたいですが、アトリエでは小さな絵が描ければいいと思っています。一つの絵を描いた上からまた描いてというのを繰り返していたりします。2年たってもまだ描き続けているものもある。

——じっくりと制作されるんですね。

浅井 完成させなきゃっていう気持ちはそこまでないんです。ただ、描くことで、「これまで見たことのないものが見える場所」に行けるときがあって、その術^{すべ}を見つけるのがおもしろくて描いています。そして、そういうものが描けたら、忘れないように取っておく。作品の種づくりみたいなものですね。

知らない場所に行って大きな絵を描くことも、たぶんこの延長線上にある。そこでは、アトリエでつくった種をまいて、ぼんぼん発芽させて

いくみたいな感じで描いています。

——浅井さんの作品には、土と水を使って描く「泥絵」がありますが、土を画材にしようと思われたのは、なぜなのでしょう。

浅井 僕はたぶん、自分が何かをコントロールするよりも、何かから受け取ったものを、自分を媒介にして外に出すほうが得意なんです。だから、自分がコントロールしきれないようなものを使って描きたいという思いがあって。

2008年にインドネシアで作品制作をしたときに、「日本から持ち込ん



「どんな場所にも、そこで生まれてくるべき形があるはず。」

今年、フィンランドで民族叙事詩を題材にした作品を制作したことで、各地の神話にも興味が芽生えた。

だ画材ではなくて、この土地にあるものを使いたい」と思って選んだのが土でした。インドネシアという国にすごく生命力を感じて、それを支えている土を使ってみようと。実際、使ってすぐに、自分と相性がいいことがわかった。——土って、実は色彩豊かなのですね。

浅井 土は、やっぱり場所によってぜんぜん違いますね。僕は、その場所で生まれる生命力みたいなものに興味があるんです。どんな場所にも、そこで生まれてくるべき形があるはずだ、と。前にインドの小学校の教室で描いた壁画の中に、逆さまの顔の絵があるんですが、あれは当初、逆さまに描くつもりじゃなかった。でも鼻を描くときに、どうしても手が上に動いて、逆さまになったんです。まるで、それがあべき形であつたかのように。

そんなふうに場所と自分とがぶつかって、描きたいものが裏切られるときには、すごく興奮します。それは、自分が「こだわり」だと思っていたものが、ただの「とらわれ」なんじゃないかって揺らぐ瞬間でもあ

るから。「とらわれ」では、いいものではないんです。

相性って大事で、いまだに土には飽きません。最近、絵の具に土を混ぜて描いたりもしています。陶芸にも興味があるし、今後は、そうやって土の力をもう少し拡張していくことも試してみたいと思っています。

あさい・ゆうすけ 1981年東京都生まれ。マスキングテープとペンを自在に操って植物を描く「マスキングプラント」現地で採取した土と水を使用して動物や植物を描く「泥絵」のシリーズなど、屋内外のさまざまな場所に、身近な素材を用いて作品を制作。「VOCA展2009 大原美術館賞」受賞。近年の主な個展に、彫刻の森美術館での「浅井裕介—絵の種 土の旅」(2015-2016年)。



授業レポート

鑑賞作品への “Answer Art”を つくろう!

北海道教育大学附属釧路中学校
更科結希^{くし}先生 × 2年B組^{しゅうろ} (生徒数33名)

生徒を乗せたバスが向かったのは、学校から20分ほど離れた釧路市立美術館。今回の授業は、ここから始まる。館所蔵の作品を鑑賞し、そこから読み取ったメッセージへの返答となる作品、“Answer Art”を制作するのだ。

鑑賞する作品は、日本画家・市成太煌^{いちなり たいこう}の「森の話(2)」。館内に足を踏み入れ、フクロウのいる湿原の風景が描かれた絵を前にして、その静謐な雰囲気^{せいひつ}に息をのむ生徒たち。彼らがどのようにこの作品を捉え、それをもとにどのような作品を生み出すのかを追う。

■ 第1時 作品の声を聴こう

「前に予告したとおり、これから、『鑑賞した作品への返答となるAnswer Artをつくる』という授業に入ります。今日は、みんなのために作品を用意してもらいました。まずは、よく見てみてください」。更科先生の声で授業は始まった。静けさのなか、生徒たちはじっと絵を見つめ、全体から受ける印象についてワークシートに書き込んでいく。隣どうしでのやり取りを経て挙げられたのは、「フクロウの表情などに寂し



この授業のためにしつらえられた作品をみんなで囲み、対話による鑑賞を行う。

さを感じる」「全体的に暗いイメージ」「夜なのか朝なのかわからなくて不思議な感じ」といった印象だ。先生は、今度は絵の中に具体的に描かれているものへと、生徒の目を向けさせていく。「何が描かれている？」という問いに、「フクロウ」「森」「川」「エンレイソウ(※)」と答える生徒たち。「月」か「太陽」かで迷う子の発言をきっかけにして、みんなでさまざまな考えを出し合う。ここで、先生が切り出す。「近くでも見てもらいたいの、順番に前に来て、見てみてください」。生徒たちは、絵に近づき、まじまじと鑑賞する。そして、気づいたことを全体で共有していく。先生は、個々の言葉を受け止め、さらに深める問いを重ねていく。発言はゆっくりと、作品の主題に迫ろうとするものへと変化していった。

※エンレイソウ ユリ科の多年草。なかでもオオバナエンレイソウは、北海道に生育する。

授業展開(全9時間)

生徒の活動

第1時:鑑賞 “鑑賞作品”を鑑賞する

- 釧路市立美術館で「森の話(2)」を鑑賞する。
- 対話をしながら、作品に描かれている内容・メッセージを読み取る。

第2・3時:発想・構想 Answer Artの構想を練る

- 作品から感じたことや考えたことを想起し、返答したいメッセージをまとめる。
- 返答したいメッセージをもとに、作品の構想を練る。

第4～8時:制作 Answer Artをつくる

- 材料や用具の特性を踏まえ、意図に応じてそれらを使い分けるなどして、自分の表現方法を追究しながら表現する。

第9時:発表・鑑賞 他者の作品を鑑賞する

- 他者の作品を鑑賞し、美術作品のもつ価値や作者の意図について理解を深める。

指導計画

準備するもの

生徒 筆記用具、自分の作品に必要な材料
教師 端材・紙粘土・画用紙など各種素材、加工・接着・着色のための各種用具

学習目標

- 鑑賞作品から感じたことや考えたことを基に自らが表現したいことを構想し、構成を工夫しながら創造的に表現することができる。

評価規準

- 主題などを基にして、主体的に構成を練ろうとしている。(美術への関心・意欲・態度)
- 材料や用具の特性などを生かし、工夫して表現しようとしている。(美術への関心・意欲・態度)
- 主題などを基に想像力を働かせ、形や色彩の効果を生かして、省略・強調などを考え、創造的な構成を工夫して、表現の構想を練っている。(発想や構想の能力)
- 自分の意図に合う新たな表現方法を工夫するなどして創造的に表している。(創造的な技能)
- 造形的なよさや美しさ、表現の工夫について思いや考えを話し合い、対象の見方や感じ方を広げて鑑賞している。(鑑賞の能力)

——特集——
鑑賞から
主題を
生み出す

美術での学びをより深いものにするために、表現と鑑賞の指導の関連を図ることが求められています。しかし、それは具体的にどのような授業によって実現されるのでしょうか。その一つの在り方として、鑑賞作品から受け取ったメッセージへの返答となる作品をつくる、という授業をご紹介します。

生徒1「近くで見ると、フクロウの目の力が強い。何か問いかけている感じがします」

生徒2「なんだかすごく『見られている』みたいな感じ」

先生「フクロウは何を見ているんだろう。視線の先に何があると思う？」

生徒3「何かに焦点を当てているのではなく、心がないかのように、ぼうっとしている」

生徒4「普通なら目は白く輝いていそうなのに、黒で塗りつぶされていて、少しおかしい」

生徒5「遠くを見ているような気がする。力が入っていないくて悲しげ」

生徒の多くは、フクロウから悲しげな印象を受けたようだ。その後も、2羽のフクロウの関係性や状況について意見が交わされていく。そんななか、一人の生徒が「フクロウって、木の上にいるイメージがあるけれど……」とつぶやいた。先生はそれを受けて、投げかけた。

先生「でも、絵の中では地面に降りている。どうしてだろう」

生徒6「この2羽は夫婦。誰かに子どもを連れ去られて、飛び立てないでいるんだと思います」

生徒7「近くに水があるので、水を飲んだ後なんじゃないか」

生徒8「フクロウの下にあるのは木。人間の環境破壊で倒れた木をフクロウは見ている」

先生「それぞれに違う意見があるね。では、少し視点を変えて。ここに描かれていない森の奥って、どうなっているんだろう」

生徒9「同じように森が続いている」

生徒10「奥の方は、人間が作り出した、電気のある明るい世界」

生徒11「手前は全体的に暗いので、悲しげで現実的な感じ。奥は明るいので、理想みたいな感じ」

生徒12「何も無い、ただの草原」

生徒たちの頭の中に、しだいに物語が立ち上がっていく。ここで先生



「森の話(2)」市成太煌
紙本彩色(岩絵具・ニカワ／和紙)
175×136cm 1973年

が告げる。「みんなは、ここからどんな世界を想像するだろうか。そして、これにどんなメッセージを送るだろうか。残り時間はあと10分。じっくりと作品を見てください」。

近づいたり、離れたり、生徒たちは自分の見方で作品と向き合い始める。「奥の空間が目立つ」「水の流れはどうなっているんだろう」などと、友達と自由に意見を交わし合いながら、彼らは、作品の中にそれぞれの世界を見いだしているようだった。



左／席を立ち、作品を間近で鑑賞する生徒たち。
上／エンレイソウを知らない生徒もいる。その話題が出たとき、先生は資料を見せながら簡単な説明を加えた。
右／ワークシートを書いている間はこまめに生徒に声をかけ、印象や感想を引き出していく。

第2・3時

伝えたいことの構想を練ろう

ここからは、美術室へと場所を移しての授業。更科先生は、鑑賞作品を印刷した模造紙を貼り出しながら言う。「今日から、Answer Artの制作に入ります。Answer Artとは、返答としての作品のこと。みんなが受け取ったことに対して、どんな返答をしたらいいだろう。それを考えながら、構想を練っていきましょう」。

まずは「鑑賞作品から受け取ったこと」と「鑑賞作品に伝えたいこと」をワークシートに書く。しかし、「作品へ返答する」という概念を捉えることは、生徒にとって思いのほか難しい。先生は、「手紙」を想起させながら導き、返答したいことをカードに書いて黒板に貼るよう指示した。「自然の豊かさ」「光」「希望」「環境」「現代社会」……。黒板に並んだ言葉全体で共有する。

今回、先生は、作品の素材、使用する画材、平面・立体の選択を、生徒自身に考えさせることにした。ただし、大きさは縦・横・高さ20cm程度を目安とする。限られた条件の中でよりよい表し方を追究し、自ら選択させることがねらいだ。

「では、アイデアスケッチに入りましょう。今回は、素材も各自準備してもらいます。ただ、今の時間に素材からイメージしたい人は、このテーブルにいろいろと用意しておいたので、ここで見たり触ったりして考えてもいいですよ」。教室中央のテーブルの上には、作品づくりに使えるようなものが所狭しと並べられている。そこで素材を手を考える子、席についてスケッチに取り組む子、生徒は



アイデアスケッチを見せながら、自分の作品についてグループのみんなに説明をする。

それぞれに構想を膨らませていく。先生は、必要に応じて生徒の手を止め、過去の授業での先輩のスケッチや作品を見せながら助言することも忘れない。

スケッチがだいたい描けたところに、先生から声がかかる。「一度、グループで話し合いましょう」。4人グループでスケッチを見合い、アドバイスをし合うのだ。教室に、生徒たちの声が広がる。どの子も、友達のスケッチに目を落とし、より思いが伝わ

る表し方を真剣に考えている。アドバイスを受けた生徒は、うれしそうにそれをスケッチに書き加える。

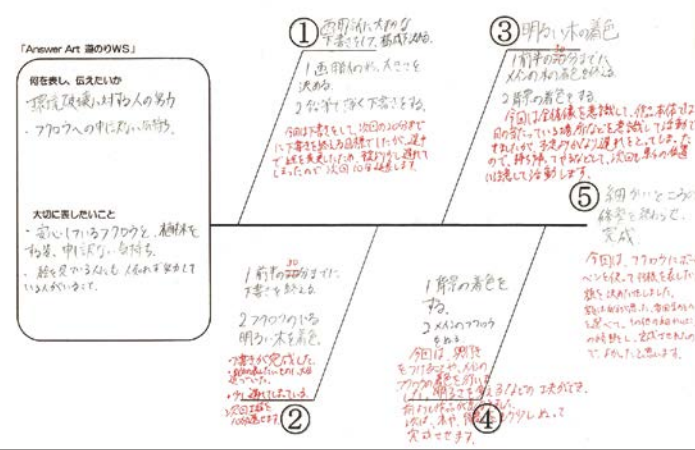
話し合いが終わると、先生からの指示。「今回は、制作の手順も自分で考えていきましょう。それも含めて学習だよ。制作時間は5時間。1時間ごとの計画を立ててください」。生徒たちはとまどいつつも、隣の子と相談するなどして取りかかる。次回から、制作が始まる。



上／マグネット付きのカードを黒板に貼る。
左／素材を見たり触ったりしながらイメージができるように、先生が用意した。



「特集」
鑑賞から
主題を生み出す



「特集」
鑑賞から
主題を
生み出す

制作状況を見直し、変更点が書き込まれたワークシート。

第4～8時 見通しをもって表現しよう

「実際の制作は、計画どおりにいかないもの。でも、ワークシートに書いた『大切に表したいこと』は必ず実現してください。そこはこだわるところ」。更科先生の声とともに、生徒たちは、自分で決めた手順に沿って、Answer Art の制作を始める。

表したいことによって、必要となる素材や用具、その扱い方は違ってくる。制作にあたっては、それらを適切に選択することが重要となるが、これがなかなか難しい。着色や接着の手段、質感、大きさや位置関係など、制作を助ける知識を、先生は、毎時間、生徒たちに伝えていく。

「周りの人や私に相談してね」と言いながら、こまめに机間指導も行う。目ざすべき「大切に表したいこと」があるから、先生に助けを求めるときの生徒の相談は明確だ。先生は、美術室にあるものの全ての中からもっとも適切な素材・方法を示し、生徒に助言する。クラスの関係性ができているのか、生徒どうしでの相談も自然に行われている。

いっぽうで、時間配分を考えながら制作することも重要だ。先生は、毎時間、授業終了前に5分間、手順の振り返りのための時間を必ず取るようにした。生徒は、ワークシートを見ながら1時間を振り返り、成果と

課題、次回以降の計画の変更点を色ペンで書き加えていく。この繰り返しにより、彼らは回を重ねるごとに、その時間に行うべき作業とその手順、用具をイメージしてから制作に入ることができるようになっていった。

* * *

さて、制作開始から2時間目のこと。先生はさりげなく、こんな大発表をした。「今回、完成したみんなの作品を、生涯学習センターで展示するからね。美術館で鑑賞したあの作品と一緒に」。教室に、大きなどよめきが起こる。この日、「伝えたい」「表したい」という生徒の気持ち、またひとまわり大きく膨らんだように見えた。



第9時 友達の作品の声を聴こう

いよいよ完成した Answer Art を発表・鑑賞する。4人グループになって、一人ずつ作品について解説し、感想をもらう。生徒は皆、生き生きと自分の作品について語り、友達の作品を鑑賞する。鑑賞作品という共通の出発点があるため、友達が表現したいことも捉えやすいのだろう。

その後、全体で今回の学習を振り返る。生徒からは、「一人一人の作品がまったく違っておもしろかった」「他の人の作品を見て、もとの絵の印象がまた少し変わった」という声上がる。「この後、あの作品と展示することで、本当にみんなの Answer Art が完結すると思います。ぜひ見に行ってください」と、先生。生徒は満足げにうなずいた。

- A 理想と現実という二つの世界を表そうと、瓶の中に入れる芝生シートに色を塗って2色に分ける。
- B 「希望への道」を表現するため、紙でメガホン状のトンネルをつくり、その入り口にライトをつける。
- C 人間と動物を隔てる壁に見立てたアクリル板に傷をつけることで、両者の一体化を表現。
- D フクロウの不思議な目や森に染まろうとしている気持ちを、針金を使って表す。

私の “Answer Art”

S君



「人工とは」

人工物と自然物を融合させた作品です。もっとも伝えたいことは、人工の在り方です。自然を壊す人工ではなく、自然を保護する人工であってほしいと思ってつくりました。フクロウの下には自然を表す石(意思)、羽のところには人工を表すプラスチックを使っています。

Oさん



「あたたかく包み込んで」

絵の中のフクロウを初めて見たとき、「悲しそう」「寒そう」と思いました。だから、この作品には、「自然の豊かさでフクロウをあたたかく包んであげたい」という思いを込めました。緑色の羊毛を何色も組み合わせて、ろうそく型のライトを使い、あたたかさを表現しました。

T君



「現代社会」

「現代社会」をイメージしてつくりました。自分は、フクロウの視線や背景などから、「人による自然破壊」を想像しました。あの絵にはまだ緑もありますが、今の世界では枯れ木だけの森もあります。そんな現状を伝えるために、コンテだけを使って暗い枯れ木を描くことにしました。

Tさん



「森」

伝えなかったことは、森のあたたかさです。そのため、フクロウを草でつくったり、緑で囲んだりしました。また、上を向かせることで、気持ちが上向きになっていることを表しています。土台のフクロウの周りに草をつけて巣を表し、居心地がよい場所を表現しました。

Yさん



「Darkness and Shining」

あの絵のフクロウの目に、悲しげで何も考えていない感じを受けました。だから、つらくてもその先には光があることを伝えようと思いました。明るさを表現するためにたくさん色を使い、飛んでいる2羽のフクロウをつくりました。白い羽は、「飛べるように」という願いです。

Kさん



「希望の居場所」

2羽のフクロウは、行き場がなくて悲しそうに見えたので、希望をもってほしくて作品をつくりました。中心には紙コップと竹ひごでつくったおりが、周りには木などがある自然の世界と、紙のビルなどがある人間の世界があります。おりの中にはフクロウがいます。



美術館との連携

今回、更科先生は、地元の釧路市立美術館に協力を仰ぎ、連携しながら授業を行いました。同館学芸員・武東祥子^{ただけだばしょうこ}さんにお話を伺いました。

未来へ文化の種をまく

当館では、子どもたちに作品を見もらうための事業に力を入れてきました。そこへ、更科先生からいろいろとご相談をいただき、「美術館でできることは協力する」という関係が生まれました。

“Answer Art”という授業のコンセプトを聞いて思ったのは、「ぜひ、実物を鑑賞してもらいたい！」ということ。作品の迫力や質感は、印刷やデジタルデータでは再現できません。送迎バスや鑑賞スペースの確保のため、先生と密にやり取りを重ね、授業の準備をしました。

鑑賞作品は、この地域の景色を描いたもの。釧路の子どもたちにはきつと親近感をもってもらえるのではと、

先生に提案しました。一つの作品をじっくりと鑑賞するなんて、普段はなかなかできません。これをきっかけとして、子どもたちが他のフクロウの作品に興味をもったり、美術館に足を運んだりしてくれたらこんなにうれしいことはありません。

未来へ文化の種をまく。そんな思いで、取り組んでいます。
(談)



釧路市立美術館
学芸員の武東さん



授業終了後、釧路市生涯学習センターの市民展示ホールにて、5日間の会期で開催された「Answer Art展」。鑑賞作品「森の話(2)」と生徒がつくった作品が一堂に会した。多くの来場者が訪れ、作品を鑑賞し、それに対する「返答」を感想ノートに残した。

釧路市立美術館

市民の生涯学習の拠点、釧路市生涯学習センター(まなぼと幣舞)に併設されている。小・中学生や高校生の美術館鑑賞を推進するため、バスでの送迎と学芸員による作品解説・実技講座などのプログラムを積極的に展開している。

授業を終えて

きっかけをどう演出するか

「子どもたちが自ら主題を生み出せるようにするには、どうしたらよいだろうか」。本題材を構想する際に自分へ投げかけた問いです。「表したい」と思えるきっかけをどう演出しようか考えていたとき、釧路市立美術館所蔵の一つの作品に出会いました。なじみのある植物に囲まれたフクロウに、物語性を感じました。

鑑賞では、感じたことや考えたことを仲間と共有し、作品の理解を深めることによって、それぞれの考えを生み出していきます。それを起点にして、「鑑賞作品に返答する」と

いう表現ができないだろうかと考え、本題材を計画しました。実際の授業では、作品の表現の主題を想起できるような鑑賞時の発問構成、自分の表したいことに合わせて素材や表現方法を選択できるような制作時の環境整備に力を注ぎました。

授業を終えて、仲間のアドバイスを真摯に受け止め、よりよい表現を目ざす子どもの姿勢に、仲間と共に未来を創造していく力強さを感じました。作品展では、多くの市民の皆様から、Answer Art への返答をいただきました。それを子どもたちに



更科結希
さらしな・ゆき

北海道生まれ。北海道教育大学附属釧路中学校教諭。北海道教育大学卒業後、北海道釧路町の公立中学校教諭を経て、2012年4より現職。2015年、北海道教育大学大学院修了。

返したときの「いい顔」は忘れられません。そんな顔が続く授業を今後にも展開したいと考えています。

授業を参観して

光村図書中学校『美術』の著作者である山崎正明先生に、今回の授業を参観していただきました。



山崎正明
やまざき・まさあき

北海道生まれ。北翔大学教授、元千歳市立北斗中学校教諭。北海道教育大学札幌校卒業。埼玉県で講師を務めた後、北海道の公立中学校教諭に。全国大学造形美術教育教員養成協議会事務局。自身のブログ「美術と自然と教育と」で、授業実践や生徒作品などを紹介している。光村図書中学校『美術』教科書の著作者を務める。

学び合い、高め合う 美術の授業

更科先生の授業を参観するのは、毎回とても楽しみでした。生徒たちがあらゆる場面において、仲間と共によりよいものをつくりあげようとする意欲にあふれていたからです。生徒どうしが、ごく自然に、他者に意見を求めたり、感想を述べ合ったりする。「主体的・対話的で深い学び」の姿がそこにありました。それは、教室の中で一つの理想的な社会が成立しているかのようでした。

このような学びの姿を生み出した最初のしかけが、第1時の鑑賞活動です。生徒への問いかけとして先生が選択した作品「森の話(2)」は、北海道らしい風景が描かれていることから身近に感じられ、かつ物語が生まれやすいものでした。作品の選択は非常に重要です。そのうえでの「対話による鑑賞」ですから、発言も活発になります。こうしてさまざまな見方や考え方を共有する中で、生徒たちは作品の中に自分なりの意味や価値を生み出していくおもしろさを感じ取っていました。

次に、この作品から受け取ったことに対する返答を、今度は自分が作品で表現するわけですが、授業ではその表現方法や材料、さらには制作手順も生徒が決めるようになっていました。活動の中に選択・意思決定

の場面をつくることは、学びを主体的にしていきます。時間の配分も重要です。今回の授業では、発想・構想の段階がとても丁寧に扱われていました。最初の鑑賞が発想の段階の一部になっていて、その後、構想のための時間を2時間保障しています。これは「自分の主題」を明確にするために必要な時間です。また、一つの題材で多様な表現をする授業では、教育活動全体を通した計画に加え、その学びを支える「教室の環境の構成」も欠かせません。美術室にはさまざまな材料や用具、機器や資料が十分に整備されていました。

3年間の美術の時間の中間点である2年生のこの時期に、鑑賞と表現の関わりについて深く考え、美術に対する感じ方や考え方を広げ、深めたことによって、今後の生徒の学びはより充実していこうと期待できます。

そして、この実践のもう一つの大きなポイントは、更科先生が、釧路市立美術館学芸員の武東さんと相談して鑑賞作品を選び、校外での作品展にまでつなげていたことです。地域の資源を有効に活用しながら子どもを育てつつ、地域の文化も大切にするという意味で、その取り組みはたいへん示唆に富むものでした。このような実践が全国各地で行われたならば、美術教育の可能性はますます広がっていくことでしょう。

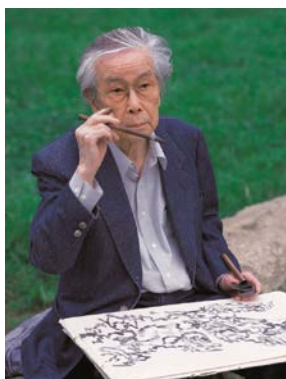


「特集」
鑑賞から
主題を生み出す

作家の肖像

第 13 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



1912-2007
高山辰雄

たかやま・たつお
1912年大分県生まれ。日本画家。
東京美術学校(現 東京藝術大学)
在学中より同校教授の日本画家・
松岡映丘に師事。34年に「湯泉」
が帝展初入選。46年に「浴室」、
49年に「少女」が日展特選。82年
文化勲章受章。83年大分市名誉
市民に推挙。95年パリで高山辰
雄展を開催。2007年 95歳で死去。

もの静かな佇まい

日本画家・高山辰雄との出会いは、
1967年に遡ります。私が勤めていた
美術館で高山さんの展覧会(※)が開か
れたときのことです。ただ、このと
きは、それほど親しくお話をするこ
とはなかった。だから思い出される
のは、その紳士的でもの静かな佇^{たたず}ま
いばかりです。

ところが、展覧会後に寄贈された
一つの作品を通して、私は高山さん
に惹かれていくことになります。そ
の作品とは、代表作「夜」。当時、日本
画への関心が薄かった私ですが、幾
度も目にするうちに、自分の中に感
動が焼き付けられていったのでしょ
うか。深い時間と空間の中に引き込
まれるようなおもしろさと新鮮さを
この作品に感じるようになった。こ
れは、私に日本画への興味をひらか
せてくれた作品なのです。

その後、もう一度、高山さんの展
覧会に関わる機会を得たものの、残
念ながら個人的なお付き合いをもつ
には至りませんでした。だから、高
山さんは、私の中ではいまだに遠く
にある存在のままです。

日本画の中に答えを求めて

「日本画は、敗戦後の現実世界を
描くのには向かない」。戦後、そう
した考え方が広がった時期がありま
す。装飾と様式によって美化された
世界を描く日本画には、いうなれば
人間の問題意識というものが何ら反
映されていないのだ、と。

高山さんは、日本画家でありなが
らこのことを克服しようとした、数
少ない現代的な画家でした。そして、
日本画の世界の中に身を置いたまま、

その難問題と向き合って、自分なり
の答えを出そうとしたのです。日本
画を投げ捨てて、外の世界に向かう
ことができたのにもかかわらず。こ
こに、日本画家・高山辰雄の“人”
と“芸術”の軌跡があると、私は考
えます。

澄明な世界へ

高山さんは、非常に思索的な人で
した。自分の内面にある衝動に耳を
澄ませて、内側から作品をつくった。
「表現する」ということには、考え
たことを整理して見える形にすると
いう側面がありますが、高山さんは
違った。考えようとして、わかろう
として表現し、そしてどんどんわか
らなくなっていったのではないか。
私にはそう思えてなりません。

高山さんはしかし、自分の心の内^{ない}
奥にあるそうしたものを、そのまま
に表現しません。それを徹底的にコ
ントロールして、澄明な世界に昇華
させることができる。それが私の心
を惹きつけるものであり、高山辰雄
絵画の本質であるのかもしれません。
亡くなる1年前に描かれた自画像
「自寫像二〇〇六年」は、その境地
に達しているといえます。

未解決の世界をさまよって、最後
まで完結しなかった。それが、高山
辰雄という人なのです。(談)

※「香月泰男・高山辰雄展」(1967年)
東京美術学校時代の同期である
洋画家・香月泰男と高山辰雄の二人展。
神奈川県立近代美術館 鎌倉にて開催。

酒井 忠康

さかい・ただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校『美術』代表著者。

著作権の関係で、
ウェブサイトでは
作品を掲載できません。

右「自寫像二〇〇六年」
紙本彩色 142×77cm 2006年
2006年に自宅で倒れて骨折後、そのリハビリを続ける日々の中で
描かれた作品。画家初めての自画像。

著作権の関係で、
ウェブサイトでは
作品を掲載できません。

左「夜」

紙本彩色 218.5×136.5cm 1963年 神奈川県立近代美術館蔵
旅先で見かけた一人の女性がじっとしゃんでいる姿に、
人間が背負わざるをえない孤独を感じ、
その記憶をもとに作品を制作したといわれる。

著作権の関係で、
ウェブサイトでは
作品を掲載できません。

上「由布の里道」

紙本彩色 216×146cm 1998年 大分県立美術館蔵
帰郷した折に立ち寄った湯布院の金鱗湖周辺を描いた。
本作をはじめとし、故郷・大分の原風景を舞台とした作品も残す。

information

日本画家・高山辰雄の回顧展が開催されます。

人間・高山辰雄展 ——森羅万象への道——

大分県立美術館の所蔵作品を核として、過去
最大規模の約120点を集め、70余年にわた
る高山辰雄の画業を回顧する展覧会。

場所 ◆大分県立美術館(大分市)

会期 ◆2018年7月7日～8月19日

開館時間 ◆10:00～19:00(最終入館18:30)

※金曜日・土曜日は20:00まで
(最終入館19:30)

美術部へようこそ! ●兵庫県南あわじ市立南淡中学校

兵庫県淡路島の最南端に位置する南淡中学校の美術部。
地域に新しい「インスタ映え」スポットを生み出した、
シャッターアートの取り組みをご紹介します。

長さ17mに及ぶ大画面

2.5×2.2mのシャッター8枚をキャンバスに、淡路島の特産品が所狭しと描かれている。

ここ「南あわじ市南淡 B&G 海洋センター」は、カヌーやヨットなどさまざまな海洋スポーツを体験できる施設だ。同施設では、利用する人々に親しみをもってもらおうと、カヌーなどを収容する艇庫のシャッターにアートを取り入れることに。そこで白羽の矢が立ったのが、艇庫に近接する南淡中学校の美術部だ。

顧問の佐竹弘衣先生によると、美術部では個人制作を中心にしつつ、年に一度は共同制作に取り組んでいるという。今回のシャッターアートの直前にも、文化発表会のステージを飾る2×6mの絵画作品を仕上げていた。しかし、長さ17mに及ぶ大画面はもちろん初めて。巨大なキャンバスに何を描くかは、部員全員のアイデアをもとに考えた。

「来た人たちが親しみを持ち、記念写真を撮りたくなるようなシャッターアート」というテーマのもと、まずはアイデアスケッチに取りかかる。キーワードは、2017年のユーキャン新語・流行語大賞にも選ばれた「インスタ映え」だ。

地域の魅力を発信

県の内外の人々が利用する施設だ

からこそ、淡路島の魅力を画面いっぱいに描いて伝えたい。部員それぞれが描いて持ち寄ったアイデアスケッチには、淡路島の特産品である玉ねぎやスイセン、レタスなどが並んでいた。それをどう効果的に、「インスタ映え」するように構成するか。

「インスタ映えといえば、ピンクや赤、パステルカラーなどのイメージ。でも、淡路島の最大の魅力である玉ねぎは地味な色合い。玉ねぎをどうやってインスタ映えさせるかは、皆で知恵を絞りました」と語るのは、部長の藤原ももさん。色が難しいのであれば、形を工夫する。鑑賞者がポーズを取ると玉ねぎの皮をむいているように見えるアイデアは、話し合いの中で生まれた。

佐竹先生によると、今回のシャッターアートの制作は、部員が地域の魅力を改めて見つめ直す機会になったという。また、個人制作では抜け落ちがちな「見た人はどう思うか?」という視点をもって制作した作品でもある。見た人に淡路島の魅力が伝わり、そこで記念の1枚を撮りたくなるように。部員たちは常にそれを意識していた。この経験は、今後の制作にも活かされていくことだろう。「また同様の共同制作に取り組んでみたい。自分の視点だけでは生まれないものが、たくさん出てくるから」。藤原さんは、笑顔でそう語ってくれた。



上ノポーズを取って撮影すると、玉ねぎの皮をむいているように見える。
中左ノ部員のアイデアスケッチには地域の特産品が並んだ。
島内には、玉ねぎのUFOキャッチャーがあるとのこと。
中右ノカップを着て、ペンキまみれになりながらの制作。
下ノ個々の作品制作の際も、アドバイスを言い合えるように机をつけて活動する。

教室を飛びだして

TECHTILEワークショップ

山口県山口市にある山口情報芸術センター(以下YCAM)で行われている
TECHTILEワークショップは、「触感」に着目するという
一風変わった試み。その現場に伺いました。



YCAMはメディア・テクノロジーを用いた新しい表現を探索するアートセンター。開館当初から「芸術表現」、「地域」そして「教育」の3分野で多数のプロジェクトを実施している。YCAMが「教育」を活動の軸に据える理由は、昨今のメディア・テクノロジーの進化の中で、子どもたちがメディア・リテラシーを身につけるだけでなく、それらを使いこなして創造力を発揮してほしいと考えているからだ。

TECHTILEワークショップは、教育プログラムの一環として、YCAMが慶應義塾大学と共同で開発したもの。「TECHTILE」は造語で、「TECH nology based tacTILE design」を意味している。触感そのものや、触感に関する技術の研究を行う活動を指すそうだ。スマートフォンなどの電子機器が欠かせなくなりつつある現代だからこそ、身体性のあるリアリティが求められるという考えから、「触感」に注目したワークショップを行っている。

本来、触り心地とは質感など複数の感覚が総合されて感じられるものだが、このワークショップでは、触り心地を「振動」と捉え、専用マイクで採取する。さらに、振動の長さや

強弱を編集できる専用ソフトを使って新しい振動(=触り心地)をつくるというのだ。

ワークショップ会場にはアルミホイルやざる、野球バットなどさまざまな物が用意され、参加した子どもたちは専用マイクを使って、夢中で触り心地を集めていた。そもそも触感を意識して物に触れることが珍しく、「触り心地はこんなに多様なんだなあ」という声も。

好奇心をもった人間を止められるものはない。メディア・テクノロジーを使って、子どもたちの創造力が走り出す未来が楽しみだ。

山口情報芸術センター[YCAM]
<http://www.ycam.jp>
TECHTILE専用ページ
<http://www.techtile.org>

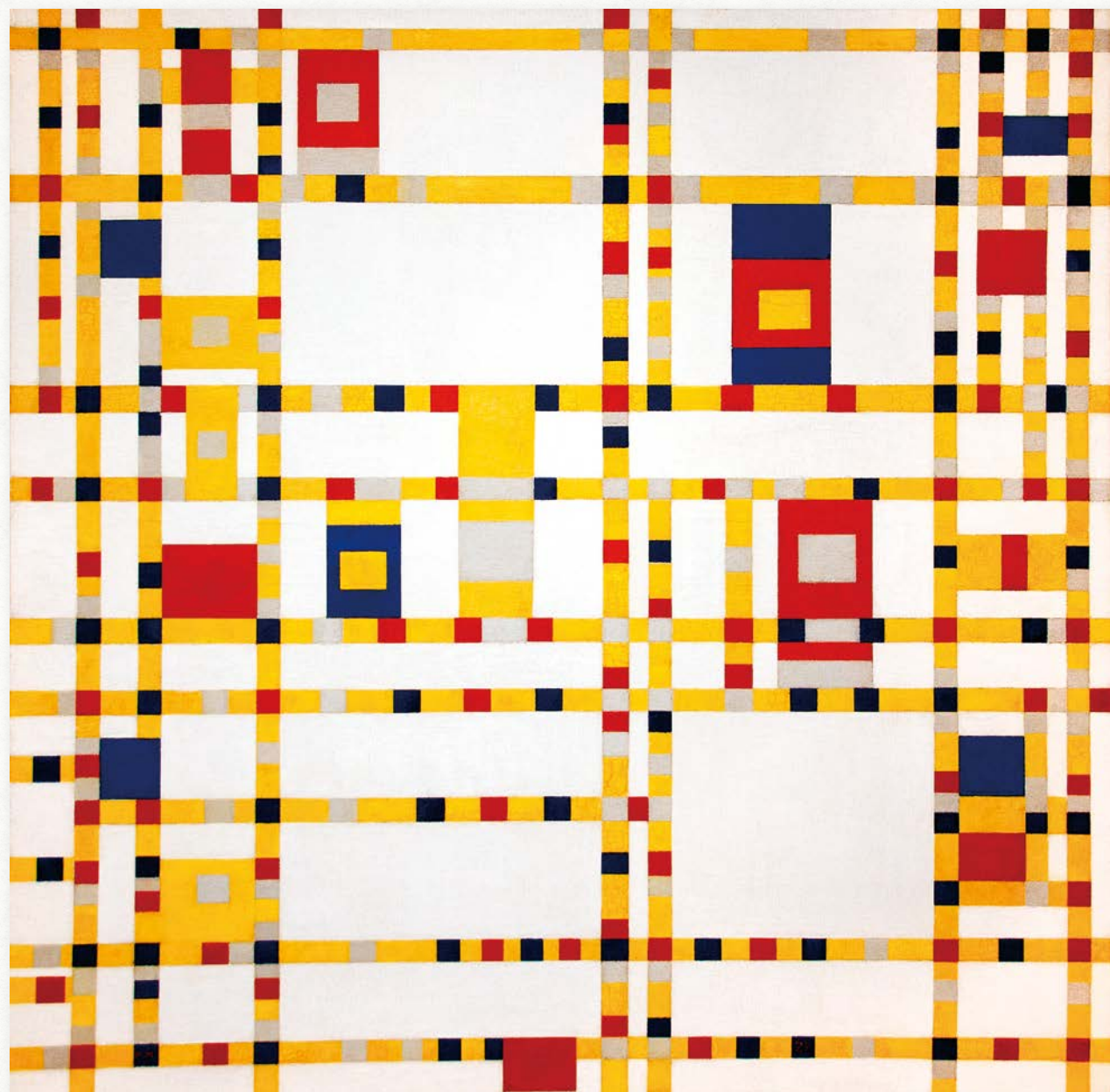


会場に用意された物だけでなく、自分の着ていた洋服から触感を採取する子も。

放課後

第13回

ART



第 13 回

「ブロードウェイ・ブギウギ」

ピエト・モンドリアン

キャンヴァス、油彩 127×127cm

1942～43年 ニューヨーク近代美術館蔵

※『美術2・3』P33に掲載

モンドリアン「ブロードウェイ・ブギウギ」を読む

絵画には、人物画、風景画、静物画などがある。20世紀になって、そこにもう一つ、抽象画が新たに加わった。人物、風景などは描く対象が目に見える具象の世界のものだが、抽象画は、そのような「対象」のない美術の新しい展開だった。

カンディンスキーのような「熱い」心の動きを反映した抽象画や、このモンドリアンのような「冷たい」理知的な造形感覚の抽象画など、現代アートは様々な試みをしてきた。もちろんイスラム美術など、抽象的な造形の美術はそれまでもあったが、モンドリアンの属する西洋美術の世界において、抽象画というのは、やはり20世紀の現代アートの新しい潮流だった。

しかしモンドリアンの絵画は、単なる「無対象の世界」ではない。モ

ンドリアンが抽象画へと至った道を見ると、具象の光景の中にある要素を単純化し、そこから水平線と垂直線を抽出し、自身の芸術世界を作り上げていくという探究の時期があった。形だけでなく、色彩も単純化・抽象化され、赤・青・黄の三原色(それと無彩色の灰色)だけで描かれるようになる。

ところが晩年、垂直と水平の線と三原色だけで構成された「抽象画」に、再び具象的な風景を連想させるものへの変化が見られた。それが「ブロードウェイ・ブギウギ」だ。この絵は、マンハッタンの道路が南北に交差する光景や、地下鉄の路面図を連想させるイメージでもある。もちろん、あのモンドリアン・スタイルの形と色、という約束は崩してもいない。その絵には、タイトルに

もある音楽のリズムや、街の輝き、トキメキ、しかし抽象的な造形美、そういった「全て」が盛り込まれている。

かつて抽象画が登場した頃、絵画は具象であるべきか、それとも抽象画か、と二者択一のような風潮の時代があった。しかし21世紀に入ると、世界のアートシーンのトップランナーである、ゲルハルト・リヒターやダミアン・ハーストなど、具象画も抽象画もどちらも描く、というアーティストが増えてきた。今や抽象画は、人物画や風景画、静物画と対峙するものでなく、それらと並列する絵画の一つとなった。

テーブルの上のリンゴを描いた後に、次は抽象画を描いてみるのも良い。それはどちらも「絵画」という一貫した世界なのだから。

布施英利
ふせ・ひでと

1960年群馬県生まれ。美術批評家。東京藝術大学大学院修了後、東京大学医学部助手などを経て、現在に至る。著書に『脳の中の美術館』(筑摩書房)、『わかりたい!現代アート』(光文社)など多数。光村図書中学校『国語』教科書(2年)に、書きおろしの説明的文章「君は『最後の晩餐』を知っているか」を執筆。